

家の方への相対化(分離)と上方への相対化(統合)という二つの動きを多種多様な具体的実態に則して、理論的観点(社会統合論と国際統合論)から比較検討しようとするものである。それは、分離と統合がトレード・オフ関係ではなく、むしろ微妙な相互依存関係にあることを、理論的かつ実証的に検証しようとする試みである。

具体的には、本書(编者による総括的序論、および一四編の論稿から構成されている)においては、①国際統合論・社会統合論のサーベイ、およびその原論的考察、②欧州共同体、ASEAN、ラテンアメリカにおける地域主義の概観、③北米、東欧、東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、オセアニアにおける分離と統

合の諸相のケース・スタディ、という三つの作業が展開されている。

モグラ叩きゲーム

「モグラ叩きゲーム」に勝つ秘訣は、モグラの動きに翻弄されることなくじつくり腰を据えることである。その意味では本書の出版は、時宜にかなっている。本書は、エスニック紛争、労働移民問題、EC市場統合問題、民族対立等、今日の国際社会において同時多発的に噴出し、きわめて複雑な様相を呈している諸問題の理解に不可欠な基本的視座を提供するものである。本書は、情報過多に悩まされている読者に対して、コンパクトなガイドラインを示すものである。

残された課題は、本書が読者として学問の共産主義問題研究所教授の任に

て想定していない人々に対してどのようなインパクトを与えうるかという問題である。それは、国際政治

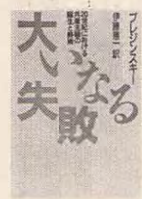
「学」の存在意義を問うものである。評者がその任にないことはいまでもない。

評者●中嶋 嶺雄(東京外国語大学教授)

Z・ブレジンスキー著
伊藤 憲一訳

『大いなる失敗』

20世紀における共産主義の誕生と終焉



飛鳥新社

1900円(税込)

東欧の「脱共産主義現象」を予見

本書は、東欧諸国の「脱共産主義現象」(本書三三五頁以下)がまさに現実化しつつあった時点で邦訳刊行されたという意味でも、まことに時宜に合ったものである。

しかも著者は、長年コロンビア大

著者 Zbigniew Brzezinski 一九二八年ポーランド生まれ。コロンビア大学教授を経て、米カーター政権の国家安全保障問題担当大統領補佐官をつとめた。中国・ソ連研究の権威としても知られている。

あり、カーター政権下で大統領特別補佐官もつとめた「戦略思想家」

宇沢弘文著

経済解析

基礎篇

〈27日刊〉
将来経済理論の研究を志す人々、あるいは先端的な理論研究の源流を探りたいと思う人々のために、経済解析の基礎的事項と分析方法を解説した。永年の研究のうえに立って体系化を試みた「宇沢経済学」の展開であり、現代経済学の真髄を提示。
B5判上製、64頁、定価一三〇〇〇円

「豊かな社会」の貧しさ

宇沢弘文著

〈好評既刊〉
〈豊かな日本〉の病理とその根底にある抽象的な経済学の功罪を抽出する。
B6判、定価一六〇〇円

梅棹忠夫

情報管理論

学術情報の生産・流通・蓄積を壮大なスケールで構想してきた著者は、書斎から図書館・博物館にいたる情報のシステム管理を具体的に提案する。今日のテクノロジの中で考察された「知的生産の技術」の新しい展開。
四六判、定価一五〇〇円

岩波書店

東京千代田一ツ橋
(定価は消費税込み)



(訳者あとがき)として、ヘンリー・キッシンジャーとともに世界に知られた存在である。本書がベストセラーとして注目されねばならないゆえんである。

著者はこれまでも、ポーランド系アメリカ人としての「反共」の立場から、共産圏に関する数多くの業績を残しているが、「共産主義は、ソ連で社会不安を引き起こし、東欧で拒絶され、中国で一段と商業化の道歩んだことによって、世界中でイデオロギーとしての信頼性を失ってしまった」(二五二頁)という指摘などは、本書のとくに前半部分で光っているマルクス・レーニン主義やスターリン主義への批判的考察とともに、著者にしてはじめて成し得る説得力をもっている。

このような本書は、著者積年の一貫した問題意識に支えられており、今日の社会主義世界の変貌に照らして、著者の立論の根拠を読者は十分に確かめることができる。

それにしても、本書はその刊行が早すぎたのではないか。「本書は一九八六年に構想を練りはじめ、八八年夏に完成をみた」(五頁)というが、一九八九年の中国天安門事件と

同年後半以降の東欧の激動は、著者の予想をも上回るものであり、現実の進展のまえに、本書の著述がもはやアウト・オブ・デイトになっていく個所が多い。東欧の「脱共産主義化」をハンガリーとポーランドにおいて見通している点はさすがであるが、著者の予測(第二四章と三二九頁の表)を超えてそれは東欧全土にまで及んでしまった。

鮮烈にして陳腐

とくに本書の重要部分を形成している中国に関しては、著者が趙紫陽経済戦略が提起された一九八七年秋の中国共産党第一三回大会前後の時点での評価に依っているために、昨年春以来の民主化運動の高揚とあの天安門事件の悲劇、そして今日の恐怖政治とイデオロギー的再強化という現実には照らせば、著者の見方がいかに甘かったかが歴然とする。もとより著者も当面の中国内政の問題点を指摘しており(二二七頁以下)、「中国が政治的緊張にさらされることは、避け難いと思う」(三三三頁)とも述べてはいるものの、全体のトーンは「鄧小平の確固たる権力のもとで、中国指導部は改革を推進する

ことができた」(二四二頁)と言う表現によくあらわれている。

多くのアメリカの中国研究者やキッシンジャーをはじめとする戦略家と同様に、総じて中国の改革を成功だと早とちりでみなし、その分、ソ連は失敗だと速断して「教養上も実践上も、中国は社会改革と近代化の両面でソ連に先んじていた。…ゴルバチョフのスピーチはイデオロギー的な迫力に欠けており」等々と述べ、今日の中国やソ連の現状に照ら

せば納得できない表現が多い。むしろ、中国についても共産党支配下の社会主義では成功しないのだと、中国の呪縛から解き放たれていたら、著者の立場はより一貫したであろうし、事態を正しく見通せたのではないか。

総じて本書が大きな吸引力をもって読者をはなさない鮮烈な著にしてまた同時に陳腐な書でもあるという逆説は、このあたりに求められよう。

評者●載 国煒(立教大学教授)

戸張 東夫著

『台湾の改革派』



並紀書房
1550円(税込み)

転換期・台湾の問題点を浮き彫り

著者の戸張東夫といえは、香港に駐在(一九八三～八八年)した中国語に堪能な読売新聞の記者。个性的で、中国大陸、香港、台湾の問題を有機的な連関において捉えることのできる珍しい日本人として知られている人物だ。

かねてから、評者は、香港出版の

□著者□ とはり はるお 一九三八年生まれ。東京外国語大学卒業後、読売新聞東京本社に入社。二回にわたり香港特派員をつとめ、現在は解説部次長。

中国語雑誌で、氏の論述なканすく台湾関係のものを読ませて頂いていた。爾来、それらの論述を整理、日本文に訳編して出版したら、日本人